
漂流者はハイブリッドな現役将校～オヒトヨシナシニゾコナイ～

金貨の騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漂流者はハイブリッドな現役将校〱オヒトヨシナシニゾコナイ〱

【Nコード】

N0721X

【作者名】

金貨の騎士

【あらすじ】

地球、海鳴市にやって来た次元漂流者は魔法と質量兵器の両方を使用する軍人だった……。作者はこれが初挑戦な初投稿です。どうかよろしくおねがいします。

プロローグ（前書き）

はじめまして、金貨の騎士です。よろしくお願いします。

ブローグ

緊急報告

第374特別調査地区の探査中、突発的次元崩壊が発生。崩壊そのものは元々危惧されていたため特に問題は無く、調査地区の全技術データも回収に成功。

しかし、

その次元崩壊に1名、この部隊の指揮をとっていた《ファイア・レイガード》が巻き込まれ、
行方不明となった。

彼の損失は第374地区の全技術データ消滅以上の痛手になるため、目下捜索中である。

ベルフィア連邦政府軍第七師団大隊副隊長リオル・ヴェルシア
中佐・記

第一話（大修正）（前書き）

いざ参らん本編に。

第一話（大修正）

―第97管理外世界・地球・海鳴市・18：28―

???side

・・・え〜と、とりあえず落ち着け俺、冷静になれ俺。ゆっくりでいいから自分の事を思い出せ俺。

名前はフィア・レイガード、二十歳、職業軍人、独身。よし、完璧。とりあえず・・・

――むくり

起きよう。しかし全身ズキズキするが特に・・・

「・・・頭痛えええ・・・。酒でも飲んだっけ？」

そうだ、さっきまでみんなで居酒屋にでも行ってそのまま路上で眠ってしまったんだ。そうに違いない。

断じて亜空間での任務中に事故って時空をジャンプしたわけ・・・

《フィア・・・あなたが参加した飲み会は2年前が最後ですよ？》

「なんか俺が寂しい奴みたいな言い方だけど、仕事が忙しかっただけだからな！？そしておはよう！！リリア！！」

フィーアは左腕に着けている腕時計のようなサポートAI兼通信機のリリアに返事を返した。

「・・・リリア、いったい何が起きたんだ？」

《あなたがだいたい覚えてる通りだと思いますが？》

「構わない、状況を報告せよ。」

幾分口調をまじめにし、そう言った途端にリリアの口調もそれに応じるがごとく変化した。

《報告。民歴56年5月。我々第七師団Ⅰ大隊は大隊長の指揮のもと突如亜空間に出現した第374特別調査地区の探査及び技術データの回収の任務を遂行。しかしその終盤で危惧されていた時空崩壊が発生、部下の退避を優先した指揮官1名が脱出に失敗、現在行方不明扱いとなっております。》

「その行方不明者ってのは当然・・・」

《あなたのことです。》

あちゃあ〜と額を抑えながらフィーアは呻いた。そういや新兵が時空崩壊から逃げ遅れていてそいつ助けてたら自分は間に合わなっかたんだっけな・・・

「一応確認するが俺の頑張りは報われたのかい？」

特にその新兵と自分の副官であり親友のリオルが気になる・・・

《死人0、行方不明者もあなただけ、というのが今の私の最後の記録です。》

「お前が言っならそうなんだろ・・・まあ少し気が楽になったよ。」

さて、これからどうしようか。通信機兼サポートAIのリリアに軍から通信が無いところを考えると、エライ遠くに跳ばされたんだろうな・・・。このリリアは銀河一個分離れた場所からリアルタイムで通信できる程高性能なのだ。そのリリアに通信が一個も無いということはここがリリアが圏外になるほど遠い場所にいるか、軍に捨てられたかの二択しかないのである。後者にいたっては自分は即行でクビになるほど上官にも部下にも嫌われてないので無い筈。ていうか後者だったら泣く・・・。

「まあ、何にせよここがどんな世界だか調べるのが先決かな？」

《そうですね、この世界の生活水準もさほど低く無さそうなのでサバイバルすることも無いでしょうからまずはこの世界の知識を集めましょう。》

「よし！そうと決まれば早そつk《警戒！！9時方向！！》・・・え？」

あゝ、俺そういえば路上にいたんだった。周り見りやリリアの言う通り割と文明高そうじゃん、てことは自分の世界にもあった車輪が4つ付いたアレ・・・

——ドキャア！——

・・・いつまでもいたら自動車が通るに決まっているじゃん・・・もつとも、“この程度”で俺は死なないのだが・・・。

キリミミ状態で空中を舞うさなか、フィーアは視界の端になんとも言えない表情でこちらを眺めている金髪の少女と犬耳の女が見えた気がしたがハッキリ確認する前にこの世界に來た時同様“また”顔面から地面に落ち、視界がブラックアウトするのだった。

《・・・先が思いやられます。》

第一話（大修正）（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております。

プロフィール（前書き）

オリ主フィーアの紹介

プロフィール

名前 フィーア・レイガード

年齢 満二十歳

性別 男

職業 軍人（階級については黙秘）

容姿 赤みのある茶髪で瞳は紺色。

顔はよく優男呼ばわりされる程度に整っている。
やや長身長屈。

服装 故郷の軍隊の軍服と士官帽を装着。旧日本軍の軍服に似ている。

全体的に黒色で、控え目に金色の装飾とボタンが付いている。
フィーアの軍服はカスタムされており上着の裾が膝まで伸びている。

性格 基本お人好しだが、悪知恵がよく働くため抜け目が無い。

戦術 剣と銃と魔法と気功術

第二話

フエイトside

魔導士フエイト・テストロッサは困惑していた。

母親の指示のもと、ジュエルシードというロストログアを集めるため海鳴市を一通り探索し、ひとまず今日は切り上げ、自宅兼拠点にしているマンションへの帰り道の途中に倒れている男を見つけてしまったのである。その男がただの人間なら別に対処に困ることなかったのだが、

《マスター、あの男から魔力反応があります。》

自らの愛機バルディッシュのこの一言によりどうするべきか悩むハメになったのである。

（この管理外世界に魔法文化は無かった筈・・・ということは、あの人は時空管理局員か次元漂流者のどちらか・・・）

今、自分たちが管理局と接触するのは非常にまずい。しかしこのまま放置した場合、後々敵として脅威になるかもしれない。何より漂流者だった場合、彼女の性格上ほっとくこともできなかった。

この葛藤としばらく戦い続けること数分、

「——エイト、フェイトったら!!」

「っ!!、ごめんアルフどうしたの？」

使い魔のアルフが声をかけてきた・・・というかさっきから呼んでいたらしい。集中しすぎて聞こえなかったようである。

「アイツ目が覚めたみたいだよ。」

そう言われアルフの指さした方を見ると確かに男はむくりと起き上っていた。改めてよく見てみると、その姿は全身黒色で物々しく、腰には日本刀とレイピアが合わさったような剣がぶら下げられていた。

——確実にこの世界の人間じゃ無い。

フェイトはそう結論付け、一層警戒しつつ観察することにした。

「・・・なんか一人で喋りだしたね。（・・・変な人。）」

「いや、左腕に付いてる何かに話しかけてるみたいだよ。」

「アルフ、見えるの？」

「フェイトがバルディッシュと話してる時もあんな感じだからなんとなく・・・。」

「・・・。」

一瞬痛い人に見えたあの人と同じようなことを自分がしてることを知って少し凹んだフェイトだった。

そうやって落ち込んで顔を俯かせている間に男は何かを決心したように立ち上がったのだが・・・

「・・・あつ。」

——ドキヤア——！！

アルフの間の抜けた声とすさまじい音が聴こえたので顔を上げて視線を向けると、男が自動車に派手に撥ねられていた。途中、目が合ってしまったが気にする前に男は顔面から地面に落ちた。

突然のことに二人はパニックに陥った。

「ど、どど、どうしようアルフ!？」

「落ち着くんだフェイト!!え〜と、こういう時は911だか117とかいう場所に電話するんだ!! あれ?なんか違う気がする・・・」

「私、電話なんて持っていないよ!!」

「あゝもう!!どうすりゃいいんだい!？」

——二人がカオスの極地に陥るその間際、それをくいとめる存在が現れた。

「痛えな畜生!!いきなり過ぎんだろぅが!!何が『警戒九時方向』だ!!」

《気づけなかったうえに避けなかったことが恥ずかしいのは解りますが私に当たらないで下さい。》

何事も無かった（？）ようにピンピンしながら混乱の元凶がもう復活していた。

フェイトとアルフはもう啞然とするしかなかったのだが、もう彼を無視できない存在であり状況であると覚悟した。なぜなら・・・

「さて、余計な会話はここま《凶星だったんですね？》やかましい！！・・・おい、その二人。

少し一緒に会話するのと口封じされるの、どっちがいい？」

元凶^{フィニア}がこっちに向かってそんなことを言ってきたので二人は再び混乱しそうになった。

第三話（前書き）

文才が欲しい……。グダグダ感が無くならない……。

第三話

フイア s i d e

・・・我ながらこれはないわ Orz。いきなりこんな小さい子に「お話と口封じ」の二択って俺なに言っちゃてんだろぅ……。あゝあ、金髪の子はなんか武器的出すし、犬耳は牙剥いてるよ……。リアの言う通り、いつも軽く“避けれる”筈のモノにまるで反応できなかったことに動揺していたのもあるが、それを差し引いてもさっきのセリフはナイ……。

《大人げない、みにつちい、最低、チンピラ、外道……》

「それ以上言わないでくれ、トドメになる……。えゝと二人とも今は本気にしないでくれ。お話したいのは本音だが、危害を加える気は無い。」

《おまけにロリコンですか。》

「今のでなんでそうなる!？」

「……。あの、すみません。先に一つ訊いていいですか？」

「おつとすまなかつた、いいぞ何だ？」

「・・・あなたは時空管理局の人ですか？」

若干緊張を含んだ口調でそう訊いてきた。今ので分かったことが四つ。

1つ。時空管理局なる組織が存在する。

2つ。彼女の口調からして、これは俺が敵か味方かを確かめる質問。

3つ。つまり時空管理局とそれに敵対する勢力がある。

4つ。彼女らはそのどちらかに所属してる。

（て、とこだろう。さて一番無難な返事は・・・）

「とりあえず、俺は時空管理局がなんなのか知らない。」

馬鹿正直に答えることにした。どうやらその選択は正解だったよう
で彼女の緊張が少し解けたようだ。

フエイトside

（最初の「口封じ」発言にはすごい焦ったけどそれほど敵意は持っていないみたいだし、何より時空管理局ではないなら大丈夫かな？）

バルディッシュを起動したままだがフエイトはそう思い、少し警戒を緩めた。

「じゃあ、あなたは次元漂流者なんですね？」

「それもなんなのかわからないが別世界から流れてきたのは認める。」

それを聞いてとりあえず一安心することにした。次元漂流者なら自分達と特に敵対する理由もないはずなので戦うこともないだろう。

（でもコイツ十分胡散臭いし、怪しい奴だと思っよ？変な格好してるし・・・）

念話でアルフが話しかけてきた。確かに目の前の人はこの世界でも自分達の世界感覚からしても異質な格好である。軍服で堂々と帯剣してる人なんて尚更初めて見た。

・・・確かにもう少し素性を訊いたほうがいいかもしれない。と思
った矢先、

《変質者の称号もGETしたようですね》

「もしかして八つ当たりしたこと本気で怒ってるのか！？あと犬女、
前半二つはともかく最後の一つは撤回しやがれ！！」

「アタシは狼だ！！って、アンタ今の念話聴こえたのかい！？」

「ん？思念通信でなく念話って言うのかそれ？」

《通信用電波使ってないと思ったら魔力しか使わない別物のようです。
一応通信波は拾えますが。》

いきなり会話に乱入してきた。しかも知らない言葉が出てきた。

「思念通信？」

「俺達の世界の通信手段のひとつだ。ていうかいい加減にお互い名

前くらい名乗らないか？」

そつえばまだお互いの名前すら知らなかった。

「それもそうですね。私はフェイト・テストロッサ、魔導士です。」

「フェイト！？」

まさかすんなり名乗るとは思わなかったのでアルフは驚いた。

「多分この人は見た目ほど悪い人じゃないから大丈夫だよ。」

——見た目は悪いってことかよ…とフィーアが落ち込んだのは内緒である。

「フェイトがそう言うなら……。アタシはフェイトの使い魔のアルフだよ。さっきも言ったけど犬じゃなくて狼だからね？」

「それと、私のデバイスのバルディッシュです。」

《よろしくお願いします。》

ファイア side

金髪の女の子がフェイトで、犬耳…じゃなくて狼耳がアルフで、武器がバルディッシュか。バルディッシュにもリリアと同じように自我を持ってるようだな……。うちの子に影響されなきゃいいが…。

「次は俺たちの番だな。ベルファイア連邦政府軍、L大隊所属ファイア・レイガードだ。」

《先行試作型装着式オペレーター、No12、リリアです。》

全く聞き慣れない単語が出てきたせいかフェイトとアルフはポカンとしていた。

「…えっと、リリアはデバイスじゃ無いの？」

フェイトがリリアに尋ねた。

《あなたの言うデバイスとは、そのバルディッシュが基準と考えていいですか？》

コクリと頷いて返す。

《デバイスは器はともかく原動力や構成、発生させる物のほとんどが魔法や魔力のようで、しかも武器としての役割が多いようですね。ですが私の場合、デバイスと違い魔法より機械の割合が多めで造られています。なにより私はどちらかというとコンピューターや通信機のような役割が仕事です。》

「これ俺達の世界では普通なんだけど聞いたことない？あとベルフイーア連邦も？」

「全然」

「・・・こりゃ本格的に帰れないことを覚悟しなきゃいけないかもしれない。この技術は自分の世界だけでなく全“同盟世界”での常識なのだ。ここは完全に自分の知らない世界で、知らない宇宙のようだ。」

「まあ、いいや。とりあえずよろしくな。」

「うん。よろしく。」

・・・そういえば、いつのまにかタメ口きかれとる。

こうして魔導士と将校の邂逅はようやく一段落した。

第四話

ファイア side

自己紹介も終わり一息つき、立ち話もなんなので歩きながら話すことにした。その途中、時空管理局と次元漂流者の説明をもらった。正直、時空管理局とは組織的に接触したくないし、自分の世界と接触させるとヤバイ気がする……。なんて考えてたら、

「ところでさあ。」

「ん？」

「ファイアの世界ってどんなところなんだい？」

アルフが尋ねてきたきた。

軍事関係ならともかく故郷についてなら幾分喋ってもいいか……。

「俺の世界はな、リリアを見てだいたい分かると思うけど科学と魔法が共存してる世界なんだよ。魔法を科学で補い、科学を魔法で補う。俺達自身は“魔道科学”って呼んでるけど。おかげで周囲と比

べて随分と出鱈目な世界になってるけどな・・・。」

「へえ、なんかよく解ないけどすごいんだね。」

——よく解なかったのかい・・・

「・・・そして、その出鱈目な技術を使って時空管理局のように別世界と交流がある。」

「「え!?!」」

今の発言でフェイトも会話に参加してきた。さっきの管理局の説明を聞く限り、別世界：もとい別次元世界だっけか？と交流する技術を有するのは管理局のあるミッドチルダとごくごく一部だけ、みにいってたがここまで驚くことかね？

「そんなにすごいのか?」

「少なくとも私たちは管理外世界や認知外世界でそういう世界は聴いたことがないよ。」

「うーん、ますます管理局と会いたくないな・・・。」

接触したくないのにあっちが興味を示すようなことのオンパレードじゃねえか……。

「どうして？ 私たちはともかくフィーアは次元漂流者だから保護してもらえば……。」

——“私たちはともかく”ってやっぱこの二人、管理局とトラブル抱えてるのか……

《そのあとがマズイのです。》

「リリア……？」

しばらく喋ってないからいるの忘れてたよ……。

《仮に保護してもらって私達の世界、ベルフィーア連邦に送ってもらったとしてその後、時空管理局が連邦をほっとくとは思えないのです。》

「さっきも言ったが俺達の世界の技術の半分は科学だ。それに比例して軍事力も半分以上が科学兵器……管理局が根絶を目指す質

量兵器つてやつなんだよ。交流のある同盟世界にいたっては、連邦のおかげで魔法の存在は知ってても馴染まないで科学一筋の世界もあるくらいだ。」

もし連邦がこの地球みたいに魔法文化がなければ管理外世界ということで片付くのだが、生憎かなりの高水準で普及している。十中八九接触を目論むだろうがその半面、自らが否定する質量兵器も同じくらいの割合で存在している。管理局は間違いなく質量兵器、すなわち科学を捨てると言いかねない。そして連邦がそれに従うわけもない。最悪戦争に発展しかねない。

「つーわけで何かしら考えてからじゃない限り管理局とは会いたくない。」

「アンタも大変だねえ……。」

ただでさえ遭難中だったのに敵対勢力候補の存在って、もう胃が死ぬわ……。

「本当にこれからどうし——ん？」

《北部数キロ先に魔力反応を確認！！かなりの出力です！！》

リリアの言う通りかなり大きな魔力を感じた。これは放置したらマズイレベルだなオイ・・・。

「ッ！！フェイト！！」

「ジュエルシードだ・・・！！」

二人はコレの心当たりがあるみたいだな。

「おいフェイト、これはいったい何なんだ？」

「ごめん、説明できない・・・。とにかく私達はもう行かなきゃいけない。行くよアルフ！！」

「待つてよフェイト！！えっと・・・じゃあね、フィーア。とにかく頑張りなよ！！」

そう言つてフェイトは飛び去り、それを追うようにアルフも飛び立った。魔力光の光で二人が流れ星のようだったのは措いといて、フィーアはあまりの急展開にしばしポカンとしてしまった。別に二人が飛んだことには驚かなかったが、災害レベルの魔力反応の発生源に迷わず即効で向かつて行った二人に啞然としていた。

「大丈夫か？あの二人・・・。」

《発生直後程の出力はありませんが現在も反応は消失していません。》

——そうか、だったら・・・

「行くか・・・。」

《あまり目立つ真似をすると管理局とやらと接触する可能性が増えるのでは？》

「ここが連邦の未開の地で、管理外とはいえ管理局の縄張な時点で接触は避けないさ…それに、あんな子供をほっとくわけにもいかないだろ？」

またコイツ《ロリコン》とか言ってからかっつきそうだが、あんな10歳にも満たない子供が危険な場所に行ったというのに軍人の自分がそれをほっとくなんて出来るわけないし、する気もない。

《あなたらしいですね。》

意外と普通に喋ってきた。

「そりゃどうも。ついでに言っとくが俺はロリコンじゃねえぞ?」

《知ってますよ。そして、あなたがお人好しなことも。》

そして、リリアは改めて言う。

《ついて行きましょう、どこまでも。》

フィアは短く、だが真剣に返す。

「感謝する。」

——その日、海鳴の夜空に金色と朱色の流星を追うように黒い影が空を舞った。

第四話（後書き）

次回初戦闘描写。書けるかな…。

第五話（前書き）

本格的な戦闘は次回になっちゃいました・・・

第五話

アルフside

アタシの御主人様のフェイトは一流の魔導士で、なにより優しい傲慢の主だ。でもちよつと天然なところもあつて、なんだかんだ言つて年相応の女の子なんだと思う。それはいいことなんだろうけどやっぱり・・・

「今は勘弁してほしいよおおおおおおお！！」

アルフはそう絶叫しながらその傲慢の主、フェイトを抱えて爆走していた。なんでこんな状況になったか説明するため少々時間を戻す。

〈十分程前〉

「反応があつたのは、ここだね・・・。」

使用者の願望を歪めた形で叶えるといわれるロストログア、ジュエルシード。その反応を辿つて二人は山の方までやってきた。

（あの鬼ババにフェイトが酷いことされないうちにさっさと全部終

わらせないと・・・)

内心でフェイトの母親に毒づきながらも周囲に被害が出ないように結界を張りながらジュエルシードを探す。ところが違和感に気付いた。ふいに視線を向けるとフェイトが棒立ち状態で固まっていた。おまけに使い魔の自分は主の精神とリンクしているためフェイトの今の精神状態が分かるのだが、さっきから上の空というか呆けているというか、とにかくボケっとしていた。

「ちょっとフェイト、なにボケっとしてんだい。」

不審に思いながらフェイトの方にアルフは歩み寄る。

「フェイト！！いったいどうして・・・。」

そっから先は言葉が続かなかった。なぜならフェイトが見ているものをアルフも見たからである。

—— 8つの目をギラつかせ、8つの足を蠢かす、“人間サイズ”になった蜘蛛の群れがそこにいた・・・

〈回想終了〉

そんなわけで、今アルフは目をグルグル回しながら顔を真っ青にして気絶したフェイトを抱えながら、ジューエルシードで巨大化した（種族的に繁栄したいとでも願ったらしい）蜘蛛の大群から全力で逃げていた・・・。

「ていうか何でそんなに足速いのさ！？ぎゃあああああああ！！」

飛びかかってきた一匹を必死に避ける。長い8つの足をゴキブリのごとく高速で動かしながら、使い魔のアルフとほぼ同等のスピードで蜘蛛は追いかけてきている。今すぐにでも結界を解き、そのまま空を飛んで逃げたいが、蜘蛛が外に被害を出すかもしれないので多分フェイトはそれをよしとしないだろう…。せめてなにかしら指示をくれればいいのだが当の本人はただいま絶賛失神中である。

「あゝもうつ！！お願いだからフェイト起きてええ！！」

「う・・・ううん・・・。」

「フェイト！！」

フェイトさんがロゲインしました。

「あれ？アルフおはよう。」

「寝ぼけてないでアレなんとかしておくれよ!!」

「え？（巨大蜘蛛の大群を見る）・・・キュウツ・・・。（ガクツ）

」

「ちよつとおおおおおお!!?」

フェイトさんがログアウトしました・・・。

巨大蜘蛛さんがログインしました。（ピヨーン）

シャアアアアアアアアアア!!

「来んなああああ!!」

もう駄目だと思ったその時、アルフでもフェイトでもない誰かの声が響いた。

「伏せっ!!」

アルフは反射的（本能とも言つ）に姿勢を低くした。その直後、頭上を青白い閃光が通り過ぎ、飛びかかってきた蜘蛛に直撃した。蜘蛛はそのまま吹き飛ばされ、ジュエルシードの効力がなくなり空中で霧散した。アルフは何が起きたか分からず、とりあえず後ろを振り向く。すると、さっきまで自分たちを追いかけてきた蜘蛛の群れが追跡の足を止めていた。まるでこちらを威嚇するように・・・。

「まさかホントに伏せつつって伏せるとは・・・。」

《結局、狼も犬科ですからね。》

声のした方、前を向くとそこには左手に銃身がやや長めのピストルを持ったファイアがいた。

「ア、アンタついてきたのかい！？ていうか封鎖結界はどうしたのさ！？？」

《私が解析して勝手に入口を作らせていただきました。今はちゃんと閉じてありますのでご安心を。》

「そんでアルフよ、このゲテモノ集団はなんだ？放射能でもぶちまけたのか？」

《全個体に魔力反応を確認。出力は分散して劣っていますが最初の反応物と同種のもです。ですが発生源である反応物は別の場所にいるようです》

「ややこしいから最初の反応物を『ターゲット1』とする。こいつらは『エネミー』として随時番号を追加、同時にお前は『ターゲット1』を探知しろ。」

《了解》

着々と話しを進めていくフィーア達にアルフは戸惑った。

「ちょっと、アンタら何する気だい!？」

「この騒動を静める。」

「ジュエルシードはホントに物騒なモノなんだよ!？」

「そんなのコレ見りゃ分かるさ。ついでにあのフザケタ出力でこの不安定具合・・・、災害どころか下手に暴走させりゃ世界滅亡クラスじゃねえか・・・。」

《直接破壊するのは危険なので制御して強制停止させましょう。》

フィーア達はアルフとフェイトがやろうとした『ジュエルシールド封印』とほとんど同じことをするつもりらしい。しかもこの二人（一人と一機）、よく考えると自分の張った結界にすんなり侵入してきたのだ。魔法の腕もそれなりなのかもしれない。なにより、あの蜘蛛の大群にはもう精神的にも本能的にも戦う気力が湧かなかった。フェイトにいたっては、まだ意識すら戻って無かった……。

「……じゃあ、任せるよ。」

結局フィーアとリリアに任せることにした。

「はいよ任せな。さて、単独の戦闘なんて本当にいつぶりだろう……。」

《し大隊の隊長になってからは誰かしら随伴してきましたからね。あなたの階級を考えると異常に少ない人数でしたが……。》

「上の連中が「戦果に見合わん」って言いながら無理やりよこした階級だもの。大尉以上のことはやりたくなかったのに書類仕事が増えたのなんの……。なにせよ、久々に遠慮せず殺らせてもらう。そろそろ索敵終わった？」

《完了しました。アルフさんが張った結界の中に『エネミー』が1く48体、周囲に展開中。さらに『ターゲット1』と思わしき反応が北東に確認されています。》

それを聞いたフィアは右手で剣をゆっくり引き抜き、口角を吊り上げ、獲物を見つけた肉食獣のような表情を浮かべた。アルフは場の空気が変化した気がした。

「数はさっきのを入れて50匹……。少々もの足りないが、これからの厄介事への準備運動だ……。せいぜい長引かせるよ……。」

今のフィアにフェイト達と出会った時の雰囲気は一切なく、そこには一匹の獣がいた。

《全『エネミー』、行動を開始しました。こちらに接近してきます。》

——瞬間、獣が雄たけびを響かせた。

「交戦を開始する……。来るがいい虫けらども!!一匹残らず滅ぼしてくれる!!」

——異世界からきた漆黒の魔獣が咆哮を上げ、戦場に踊り出た。

第五話（後書き）

フィアのセリフが厨二臭くなっちゃった・・・orz

第六話（前書き）

ぐああああああ戦闘描写が書けねええええええええええ！！

第六話

フエイトside

「あれ？アルフおはよう。」

「さっきとまるっきり同じセリフだね……。また気絶しないでよ。・・・？」

「気絶？・・・ッ！！」

言われてトラウマ確定のあの光景を思い出す。

「ア、アルフ！！蜘蛛は！？ジュエルシードはどうなったの！？」

「とにかく落ち着いて。そして蜘蛛共はホラ……。」

そう言つて横を指差す。視線をそちらに移した瞬間、壮絶な光景が目に入った。黒い影が大蜘蛛の群を相手に大暴れしていた。青白い閃光で撃ち抜き、鋭い斬撃を叩き込み、強烈な蹴りを喰らわせ、蜘蛛たちは黒い影により次々とその数を減らしていった。

《現在確認できるのは『エネミー』が8体と『ターゲット1』のみです。》

「フン、つまらん……。オラア!!その程度か!？」

「・・・ファイア!？」

自分のやってることに関わらせないため挨拶もそこに置いてきた筈の男、ファイアがいた。

「アルフ!!どうしてファイアがここにいるの!？」

「どうやら付いてきたみたいでさ……。アタシの結界もアッサリこじ開けて、しかもコイツらをどうにかしてやるっていうから任せた……。」

「なんで!？」

「だってフェイト起きないんだもん……。」

「・・・ごめん。て、そんな場合じゃ無いや！！コレは私たちがやらないと・・・。」

「もう、終わるみたいだよ？」

「え？」

蜘蛛はもう3匹しかいなかった。完全にフィアに恐れをなしたように、蜘蛛共は怖気づいたようにジリジリと威嚇しながら後退していた。

《残りはこの『エネミー6、14、29』と『ターゲット1』のみです。》

「そんじゃ飽きたし、もう終わらせるか。」

瞬間フィアは駆け出す。蜘蛛が迎え撃つように上下に二匹、同時に跳びかかる。それにフィアは微塵も焦らず軽くジャンプし、足を狙ってきた一匹を避けながら銃弾を叩き込み、そのまま頭上に跳びかかってきた一匹を剣で貫いた。瞬く間に二匹は霧散した。

「ハイ、ラスト。」

振り向きざまに後ろから跳びかかってきた最後の一匹に回し蹴りを喰らわせ、宙を舞ったところに銃弾を放つ。青白い閃光、リニアガンの弾丸が蜘蛛に直撃し霧散させた。

（暴れ始めてから2分たって無いと思うよ・・・？）

（す、すごい・・・。）

改めてフィアが軍人、兵士であることを認識した瞬間だった。

《『エネミー』の殲滅を確認、残るは『ターゲット1』のみです。》

「了解。おや？起きたのかフェイト。」

フィアはこっちに気づいて近寄ってきた。

「・・・フィア。なんでついてきたの？」

「俺の職業は軍人って言っただろ？こういう厄介事には首突っ込まなきゃ気がすまない体質なんだよ。」

「でも……。」

「ちょいタンマ、本命が来るらしい……。」

《巨大な魔力反応の接近を確認、『ターゲット1』です。》

「ッ！！バルディッシュ！！」

《Yes・sir・》

フェイトはデバイス、バルディッシュを起動させた。アルフも戦闘態勢に入る。

「ん？そのまま休んでいいぞ？」

「そういうわけにもいかない……これは私たちがやらなきゃいけないんだ……。」

「……しょうがねえな。ただし、無理矢理にでも手伝わせてもらっぞぞ？」

「せっかくだし、手伝ってもらおうよ。フィアってすごく強いみたいだしさ？」

「・・・分かった。」

アルフの言葉もあり、フィア達にも手伝ってもらうことにした。自分のやってることに巻き込むのは本音を言つと躊躇うところがあるのだが、実際に先ほどのフィアの戦闘を見るかぎり、フィアの戦闘技術は凄まじく高く、さらにアルフの結界に侵入できるほどの魔法の腕もあるので心強いものがある。そもそも、自分が気絶してる間に大蜘蛛の群を蹴散らしてもらった時点で今更な話なのかもしれない・・・と、そこへフィアが話かけてきた。

「ところでフェイト、お前らあの物騒な魔力反応物を・・・壊してきたのか？」

「違うよ！！それにジュエルシードは無理矢理壊そうとしたら大変なことになるんだよ！？」

血相を変えて答えた。下手にジュエルシードに刺激を与えて暴走させた場合、次元震が発生し世界が崩壊することもあるのだ。当然そんな真似はしない。

「それじゃあ、そのジュエルシードとやらの壊す以外の止め方は知ってるんだな？」

「うん。」

「じゃあ、ジュエルシードはフェイトに任すわ。リリア、『ターゲット1』の情報は？」

《分析の結果、『エネミー』が一回り巨大化しただけでしかも動きが鈍いようです。しかし、魔力反応の発生源はコイツで間違いないようです。接触まであと3分です。》

「「うわぁ・・・」」

さっきの大蜘蛛達より大きいと聞き、フェイトとアルフは顔を青くした。そんな二人に苦笑いを浮かべながらフィーアは話を続ける。

「親玉とでも呼ぶか・・・。アルフ、結界を造れるなら相手の動きを縛る魔法とか使えるよな？」

「使えるけど？」

「即席の作戦だが、まずリリアが親玉が来る場所をピンポイントで特定。アルフが魔法で動きを止め、俺が親玉を“半殺し”にする。魔法とダメージの二重拘束で動けないところをフェイトにジュールシードの封印を直接やってもらう。それでいいか？」

ほとんど無駄がなく、お手軽な作戦だった。二人は即座に頷いた。それと同時にリリアの声が響く。

《『ターゲット1』接触まで1分きりました。アルフさん、座標イメージを思念通信…念話で送りますね。タイミングも私がお伝えします。》

「分かったよ。」

「私は？」

「俺達の後ろで待機。万が一、拘束する前に封印担当のフェイトが攻撃されるところまる。」

《みなさん、来ましたよ。アルフさん、10秒後に指定した場所に魔法を。》

「え？どこにいるんだい？」

もう見えてもいい筈なのに親玉が一向に見当たらない。アルフは困惑した。

「いないじゃないk《8、7、6、…》ちょっとリリア？」

そんなアルフを余所にリリアはカウントを続けた。

《3、2、1、0！！今です！！》

「ああもうつ！！【チェーン・バインド！！】・・・って、ええ！？」

リリアの合図に若干疑いと戸惑いを浮かべながらアルフは拘束用の魔法を放った。しかし、リリアに抱いた不安は即座に杞憂に終わった。親玉は本当に現れた。“上から”・・・。着地点とそのタイミングをリリアは完全に予測していた。そしてそのリリアの合図により放たれたアルフの魔法ま完璧に決まった。しかし、親玉の図体は伊達ではないらしく、無理矢理振りほどこうとしていた。

「ヤバイ！！このままじゃ、強引に解除されちまうよ！！」

「そのために俺がスタンバイしてんだよ。」

そんな光景を尻目にフィーアは素早く、尚且つ柔らかく自分の剣を目前で振るう。すると剣が振るわれるたび光の線が引かれた。それを巧みに操り、みるみる内にフィーアは剣で光輝く魔法陣を絵描き、完成させた。そして……。

「……魔剣ヴィルガロム、魔銃モード。」

そう唱えた瞬間、フィーアの剣が黒い煙のようになったと思ったら即座に再度集合し、形を作った。ただ、フィーアの右手には剣では無く、普通のよりこつくて銃身が長い黒い拳銃が握られていた。

「【バスカヴィル・ショット】！！」

黒い銃口から放たれたのは純粹な魔法弾。魔弾はフィーアの描いた魔法陣を通過した途端、その魔力を激増させ10倍以上のサイズに巨大化した。弾丸から砲弾になった魔弾は、アルフの魔法にもかく親玉に無慈悲にも直撃した。凄まじい轟音をたて、爆炎が親玉を包んだ。

《『ターゲット1』の動きが停止しました。…いや、ちょっと待って下さい。『ターゲット1』の反応が消滅していきますー！！』》

「マジで！？もしかして加減ミスった・・・！？」

「大丈夫だよファイア。ジュエルシールド本体が現れるだけだから。」

フェイトの言葉の通り親玉の姿は消え、そこにはひっくり返った常識的サイズの蜘蛛と、光り輝く蒼い宝玉があった。

「アレが、ジュエルシールド・・・。（リリア、こっそりデータとつとけ）。」

《（了解）》

「手伝ってくれてありがとう、ファイア。あとは私に任せて。」

「おう。」

そう言いながらフェイトはジュエルシールドに向かっていく。そして・・・。

「ジュエルシールド、封印！！」

——
夜の大騒動はようやく終息を迎えた。

第六話（後書き）

やばいです・・・文がまとめれてる気がまったくしないです・・・

第七話（前書き）

ちよつと無理やり過ぎた…？

第七話

ファイア side

ほとんど化物退治になった魔力反応物：もといジュエルシード封印作業。その決着がつき、ようやく三人は一息ついていた。しかし、ファイアはフェイトたちと休みながらも思考にふけていた。

（このジュエルシードがヤバイ代物なのは解かるが、“この二人のこと”が分からん……。）

このジュエルシードはロストログアと言って早い話、超危険物なのである。そしてこれの始末は先程の説明の通りだと、ファイア自身の見解は置いとくとして、この次元世界の警察組織である時空管理局とやらの役目らしい。百歩譲ってフェイト達が時空管理局に自主的に協力してると言うのなら、こんな若い年齢で危険なことをするのは無理やり納得したかもしれないが……。

「ところでフェイト、それ（ジュエルシード）どうするんだ？時空管理局にでも届けるのか？」

「えっと、その……それはちょっと……。」

さつきから時空管理局のこととなると齒切れが悪くなるこの二人。まあ、最初の方で管理局と会いたくないみたいなのを言ってたから薄々勘付いているが、フェイト達は管理局から見たら犯罪者予備軍、もしくは犯罪者になることをしているのかもしれない。だが、解せない。さつきからフェイトもアルフも無関係な人を極力巻き込まないようにしながら立ち回っている。そんな二人が自分自身悪いと思っていることを自ら進んでやるとは思えなかった。

「じゃあ、なんでこんなことしてるんだ？」

「それとも言えない……。」

話が進まねえ……。あ、そうだ（ニヤリ）。

「じゃあ、質問を変えるわ。時空管理局の常識は誰に教えてもらった？」

「?・・・母さんにとリニスに。」

「（誰だリニスって…ま、いいか。）管理局に関わるなつったのもフェイトの母さんとリニス？」

「母さんだよ。それがどうかしたの…?」

「フェイト…お前、その母さんにジュエルシード（それ）探して来
いって言われたんだろ?」

「ッ!?!」

図星か……。世界の法律である時空管理局のこととそれに反する
行為を促すなんて矛盾を仕込むことは、このジュエルシードに
フェイトを関わらすためのことに他ならない。ということはつまり、
フェイト達にそのことを教えた者も当然関係者である。そして、フ
ェイト達は自らこんな真似はしない筈。そこからフェイトの母親が
指示したと推測した。

「と、いうわけだ。」

「・・・ファイアの言う通りだよ。私達は母さんに言われてジュエ
ルシードを集めているんだ…。」

視界の端で、急な展開についていけずにアルフがオロオロしていた
のは無視するとして…やはり、そうだったか。それにしても、こん
な取り扱い要注意の危険物を集めてどうする気なんだフェイトの母
親は?・・・ん?、今なんて言った?・・・“集めている”だと・
・?

「ちょっと待てフェイト、集めているってことはまさかジュエルシードってこの一個だけじゃないのか!？」

「え? そうだよ。ジュエルシードは全部で21個あるんだよ?」

「ハア!？」

「1個でもそうとうヤバイのに全部で21個だと!？お前ら俺の胃袋によっぽど穴空けたいらしいなオイ!!」

「もう、目的とかどうでもいいや……。一応確認するけど、とりあえずフェイトとアルフはジュエルシードを全部封印して持ち帰るんであって、暴走させて世界を滅ぼすわけじゃ無いんだな?」

「当たり前だよ!!」

「なら一安心だ…。フェイトの母親が何考えているのか不安だが、フェイトに集めろって言ったからにはそれなりの数が揃うまでは平気だろう…。それまでに色々対策考えておくか…。だが今はとりえず…。」

「俺もジュエルシード集めに協力させてもらおう。」

「「え!?!」」

「もう今更無関係とは言わせねえぞ? だいたい、自分が今いるこの世界が滅ぶ可能性があるのにそれをほっとけるわけないだろ?」

《そもそも軍人の我々が人命に関わることに無視できるわけないでしょう?》

「リリアまで……。」

「フェイト、フィーアたちに手伝ってもらってこんなことさっさと終わらせようよ。」

ほんの少し考えたが結局……。

「分かった…。改めてよろしくフィーア。そして、ありがとう…。」

「なに、礼には及ばないさ。アルフもよろしくな。」

「ああ!?! よろしく頼むよフィーア!?!」

「……こうして三人は、しばらく行動を共にすることが決まった。だが三人はまだ知らない。この出会いがその後大きな波乱を呼ぶことを……。」

「オマケ」

「ところでフィア、アンタずっとその格好なのかい？」

アルフはそのままだが、フェイトはバリアジャケットを解除して私服になっている。しかし、フィアはこっちに来た時と同様、黒い軍服のままである。

《この世界の常識の検索結果から考えると、今のフィアの格好はイタイ人です。》

「それはイヤだな……。よし、【服装換装】。」

《了解》

するとフィアの軍服がその形を変え始めた。帽子と上着は一体化

してフード付ジャンパーに、ズボンはジーパンになり今風の服装に変わっていた。フェイトとアルフは呆然としていた。なぜならフェイトのバリアジャケットのように魔力を一切感じなかったのである。つまり……。

「フイア…もしかして今の魔法使っていないの…?。」

「ん?これうち(連邦)の科学技術。」

《こんなの一般市民でも持ってますよ?》

「す、すごいんだねフイアの世界って……。」

魔法を使わず魔法染みたことをするフイアの世界にただ驚愕するしかない二人であった。

第七話（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております。

第八話（前書き）

またタイトル変えようかなあ
…？

第八話

??? side

気づいたら周りの全てが真っ黒だった・・・否、床は赤い、いや紅い・・・。辺りを見回すと、ポツンと白色の何かが目に入った。体が思うように動かなかったが、どうにかその白い何かが分かったところまで這って近づくことができた。その白い何かは銀髪、ではなく完全に色が抜けた感じのする白髪の少女だった。顔を見るとその表情は悲しみ、絶望、後悔、懺悔など全て負の感情で染められていた。同時に、この少女を自分は知っている気がした。だが、そんな考えを忘れさせる光景が目に入った。

——この空間の紅を創りだしてるモノ・・・血だらけの“かつての自分”がいた・・・。

不意に視線を戻すと少女はこちらを見つめており、そして“今の自分”に問いかけた・・・。

——イマノアナタハダレナノ？

俺は…いや“僕”はその少女の問いに何も返そうとはしなかった…。

ファイア side

「……こつち来て見た最初の夢がこれかよ…。」

起床時刻は朝の6時。今、ファイアはフェイト達と同じマンションの一室にいる。昨日の騒動のあと、拠点どころか寝床も無いの思い出し、野宿でもしようとしたらフェイトに招かれたのである。見知らぬ男をかんたんに家に泊めちゃダメ！！とアルフと二人で諭そうとしたのだが、

「ファイアはもう知り合いでしょ？」

そういう問題じゃねえ！！という感じの返答をされた。その後何度か説得を試みたが結局ファイアとアルフが先に折れた。いくら協力

関係とはいえ、いつまでも少女と同居する気はないので一日だけという条件で。

「二人はまだ寝てるな…。よし、金作りに行くか。」

異世界から来たフィアは実質無一文である。そのため、しばらくここで生活するにはやっぱりこの世界の通貨が必要であつたが、自分より年下のフェイト達に金をもらうなんて選択肢は自分には無い。別に軍人であるフィアはその気になればサバイバル生活を送れる。だが、彼が所属していた『ベルフィア軍心得十カ条』にこんなものがある。

—— 未開の地で生き延びる根性と生活する知恵をつけるべし。

要はサバイバル能力も必要だが、異国の文明にすんなり馴染む技能も必要であるということ。自分が滞在する未開の土地の人間は敵にも味方にもなる。故に相手側を理解し、可能なら味方にするだけの手腕を身につけるようにしろという意味がある。もともと、フィアはそこまで忠実にこの心得に従ってはいない……。

「それにしても…、また“あの時”の夢を見るとはな…。」

今朝、自分が見た夢を思い出し思考にふける。あの夢は自分にとって忘れない…！ いっそ否定したい過去であるが、同時に“今の自分”

を存在させている過去である。故に、否定すれば自分とこれまで自分に関わったものまで否定することになる。だから今までこのことは極力考えないようにしてきたのだが…

「まさかコレに関係することが近々起きるってか？・・・いや起りようがないか・・・。」

考え事をそのへんで中断し、流石に無断で消えるとマズイのでフェイトとアルフ宛に『少し出掛ける』という内容のメモを書いた。

「んじゃ、行つてきます。」

まだ寝てるであろう二人を起こさないように、フィアは静かに家を出た。ベランダから…。とんでもない高さから跳び降りたにも関わらず、フィアは綺麗に、静かに着地した。そして、自分にしか聞こえない程度の小さな声で呟いた…。

「俺は僕だよ」・・・エルミア・・・。」

——夢で逢った白髪の少女、かつての初恋相手の問いかけにそう答えた・・・。

第八話（後書き）

今後の伏線にするつもりのフィーアの過去

第九話（前書き）

フィーアが心得に忠実じゃ無いとはこついつこと・・・

第九話

不運な人 A s i d e

今、俺は海鳴市のある競馬場に相方と来ていた…ズタボロにされ、恐ろしい青年に引きずられながら…。

「オラッ、いい加減起きやがれ!!」

「ひいっ!! すいません!!」

微塵も抵抗する気が湧かなかった…朝っぱらから狩場であるいつもの路地裏に優男がやってきて、いいカモが来た!! いつものように二人でカツアゲしようとしたのだが…三途の川を渡りかけた…。この優男はカモどころか怪物だった。二人してボッコボコに返り討ちに合い、気絶させられ、気づいたらここにいた。コイツ俺たちをどうする気なんだ!?

フイーア s i d e

(やっぱりどこの世界にもこういう輩ってのはいるもんだな。)

（《全世界共通ってやつですね》）

フィーアはリリアと談笑しながら正座している二人の哀れな力毛達を見下ろしていた。フィーアはあえてヒト気のない路地裏に行ったのである。自分から襲ったら負い目を感じるし、なにより犯罪である。だが、犯罪者を撃退するのであれば話は別だ。自業自得な上に警察に「カツアゲしようとして返り討ちに逢いました」なんて本人たちも言えるわけない。ということで、フィーアは路地裏へ力毛狩りに向かったわけである。

（《それにしてもえげつなかったですね…》）

（すぐに気絶させたらどんな目に逢ったか相手が理解できないだろう？）

フィーアはチンピラ二人を気絶するギリギリ手前をキープしながら痛めつけたのである。その甲斐（？）あつてか二人は従順な態度になっていた。

「おい、てめえら・・・財布出しな・・・。」

「ハ、ハイ!!」

なんの躊躇もなく財布を差し出す二人。

「よし…そこで一時間待ってろ、もし待ってなかったら……後悔するぞ…?」

「一生待ち続けます!!」

そう言つてフィーアは競馬場に入つていった。

くきつかり一時間後く

ご機嫌な表情をしてフィーアは帰つてきた。そして…。

「ちゃんと待つてたか…手え出せ。」

「ハイ…。」

なんとチンピラの財布を返した。なにかしらケジメ（追い打ち）つ

けさせられると思っていたのでいきなりすることに二人は困惑していた。

「金額は足りてるよな？」

「そ、そうですね…なんで…？」

「お前らは俺に絡んで金をふんどくろうとした、俺は半ば恐喝してお前から金を借りた。だが、お前らはほとんど未遂だし、俺がこうやって金返せばお互い何も無かったことにできるだろう？…怪我の治療代も足しといたからな一応…。」

自分から絡まれに行ったことは棚に上げてそうチンピラ達を諭す。もともと、チンピラ狩りで金稼ぎする気は無く、本命はこの競馬である。軍隊生活で培った洞察力を無駄にフル活用し、強い馬と強い騎手を見分けてボロ儲けするのが本来の目的で、もうそれなりに稼いだのでこいつらと縁を切れば万事丸く収まって帰れるというわけである。

二人は顔を見合せ、考えたあげくフィーアの誘いに乗ることにしたようだ。

「へへっ、じゃあそうさせていただきやす。今日はお互い何もなかったということだ…。」

許されたことをいいことに早速調子が戻り始めた二人にフィアは少しイラツとした。罪悪感を減らすためこつこつという輩を選んだとはいえ、やっぱり腹が立つ。おもむろにそばにあった手のひらにギリギリ収まる石を拾う。

「一ついいかな？」

「？、なんすか？」

石を手で遊ばせながらこつこつ言った。

「別にお前らが俺の知らない所で知らない奴に何しようがどうでもいい……。が、迷惑かけた奴の中に一人でも俺の仲間とその身内が混ざっていたら……。」

——バキヤアッ！！

「……潰すぞ？」

手のひらサイズの石が瞬時に片手で握り潰され、粉碎された。その光景を見て二人は自分達の体が粉々にされるのを想像して顔を真っ青にした。そして、

「二度とこんな真似いたしません!!」

二人はそう言い残し、脱兎のごとく逃げるように去って行った。

「流石にこれで懲りたろう。ふ、若者の未来を正してやったぜ…。」

《あなたは一切懲りてませんね…。この方法のせいで何回懲罰されたと思ってるんですか…?》

「……教官による折檻は本気で死にかけたな…。」

当たり前のことだが、相手の自業自得であるものの故意にやっているので当然許される方法では無い。上官にバレタときフィアは地獄を見るハメになり、さらに賭博の一切を禁止された。

「まあ、これだけ稼いだからもうやる気はないよ…（博打は解禁するけど…）。さて、マンションの部屋借りる金も当分の生活費も手に入ったし、買い物して一回帰るか…。」

特に食料品…。あの二人、ロクなもの食ってないからなあ…。昨日見たがフェイトはインスタントや冷凍食品、アルフにいたっちゃド

ツグフードだなんて…。おいしいものを食べるありがたい状況を無駄にするあいつらには絶食訓練を受けた者として一言言わなきゃ気が済まん！！

「連邦政府軍一の調理兵（自称）の実力を見せてやるぜええええええー！！」――ぬッ！？」

《南東数キロ先に魔力反応確認！！ジュエルシードです！！》

ちっ、せっかくやる気出したってのに買い物どころじゃ無くなった…。しかも…、

「おいリリア、魔道士の気配もするんだが？」

《お察しの通りフェイトさんとは別の魔道士の反応を1名、いや2名確認できます。》

管理局員かもしれないな…まだ何も対策考えて無いから、今回は無理してまで行くのはやめとこうかな？なんて思ってたら、

《フェイトさん達がジュエルシードのもとへ急行した模様です。》

「…行くしかねえか。」

フェイト達だけに任せて傍観するのが一番楽で安全なんだろうけど…どうしても性に合わないだよ、そういうの…。

《やっぱりお人好しですね。》

「我ながら難儀な性格だと思うよ…。いつも迷惑掛ける…。」

《お気になさらず。この迷惑が無くなったら、あなたについてく気も無くなりますから。》

「ハハッ…。さて、行くか。」

言うや否や、フィーアはジュエルシードの元へ走りだした。

??? side

「またか…。」

とあるケーキ屋で、二十代後半のグレーの髪で緑色の目をした男はそう呟き、溜息を吐いた。昨夜から無視できない大きさの魔力反応を何度か感じていた。おかげで昨日から口々に眠れていなかったが、自分のことはぶっちゃけどうでもいい。しかし…、

「どうしたん？溜息ついて。」

「いや、なんでもない。」

万が一にでも、この子が巻き込まれる様な事になるのは断じて許せん。素性の分からぬ、異界の住人である自分を家族として認め、扱ってくれる優しいこの子にこれ以上悲しみを与えると言ふのなら…たとえ神であろうとこの手で葬ってくれる…。

「ふ〜ん、まあええか。それにしても、ここのケーキほんまおいしいなあ。」

「ああ、本当だな。」

車椅子の少女と談笑しながら男はこの厄介事に介入する決意をした。まさか自分の同類と逢うことになるとは知らず…。

第九話（後書き）

はやての口調が分かんねええええええ！！

第十話（前書き）

なのは好きの人、ごめんなさい……。作者はアンチじゃないので段々待遇はよくするつもりです。

第十話

なのは side

はじめまして、高町なのはです。訳あってユーノ君とジュエルシードを集めるため魔法少女やってます。今日、私は友達のアリサちゃんと一緒に同じく友達のすずかちゃんのお家に遊びに来ていましたけど、突然ジュエルシードの反応がしたから途中抜け出してまで封印に向かったら、

「あれは…まさか僕と同じ世界から来た魔導士!？」

ユーノ君が言ったように、私と同じくらいの金色の髪をした女の子の魔導士が現れ、手早くジュエルシードの封印を行った。そして、

「申し訳ないけど、いただいでいきます。」

いうや否や襲いかかってきた。私はそれを迎え討とうとしたのだけだ…。

「そおおおおおい!!」

「にゃあああああああああああ!？」

「なのはあああ!？」

後ろから気配がしたと思ったら誰かに掴まれて、おもいつきり空高く投げ飛ばされたの…。

一体何がどうなってるの？

フエイトside

私はただ驚いた。ジュエルシードの反応を辿ってきてみれば、ジュエルシードで大きくなった猫がいたし、自分以外の魔導士がいて少しびっくりした。でも、それはまだいい…一番びっくりしたのは…。

「そおおおおおい!」

「にゃあああああああああああ!？」

（何してるのファイア！？）

どこから持ってきたのか、フルフェイスのヘルメットを被ったファイアがいきなりやってきて白の魔導士を空高く放り投げた。白の魔導士の子は猫みたいな声を出しながら空を舞った…遠心力で…。

「よおフェイト、俺だオレオレ。」

《詐欺ではありませんよ》

「いや、分かってるけどなんであんなことを…？」

とにかく聞かなきゃ色々という意味が分からない。

「おい！！お前たち、なのはに何するんだ！！」

「うおっ、ただの獣じゃねえのか。」

《もう一人の魔導士反応は彼のようにです。》

「魔法生物ではなく魔導士なんだな？コレ。」

「わっ！ーやめろ離せ！ー！」

喋るイタチみたいな生き物を引つ掴みながらフィーアは念話で話しかけてきた、

（フェイト、こいつらは管理局の奴らなのか？）

（…ううん、違うみたい。もしそうだったら局員は名乗るらしいよ？）

（なんだよ、こんなの被らなくてもよかったのかよ。）

あ、管理局に顔を見られないようにするためにヘルメットをかぶって来たんだ…。

（そういえば、なんであの子投げ飛ばしたの？）

（敵か味方が分からないからギリギリ冗談ですむレベルで攻撃してみた。場合によっては協力関係を作りたい。人手は多い方がいいだろ？因みにアルフは先に帰ってもらった。）

あいつ、気が短いから交渉無理だろ…と、つけくわえてそう説明してくれた。フィアって、ふざけてるようで一応ちゃんと考えてるんだ。自分だけじゃこの二人に手伝ってもらうなんて考えもしなかった…。

「今失礼なこと考えたな？」

「そ、そんなことないよ？」

「…そういうことにしといてやるよ。さてと、あの子、なのはだっけ？フェイトと同じ魔導士ならそろそろ自力で飛行して戻ってくるだろ。その時にお互いの話をしようじゃないかイタチ君。」

「ぼくはイタチじゃない、ユーノだ…！」

なんて喋ってたら…

「———やああああああああっ！…！」

———びた————ん…！！

白の魔導士の女の子が戻ってきた…。いや、降ってきた…。あれ？あの子私と同じで魔導士なんだよね？

「…あの子、飛べないの？」

「なのはは魔導士になってまだ日が浅いんだよ！…いきなりあんなことされて冷静でいられるわけじゃないか！…」

「・・・ファイア？」

《・・・ファイア？》

「・・・THE DOGEZA!!」

バリアジャケットで無傷ながらも目がグルグル状態の白い魔導士の女の子、パニック状態のイタチもどき、ジャンピング土下座するファイア。なんだろうこの状況…。

結局、なのはが目を覚ます前に一般人の気配が近づいてきたので、アリスとすずかロクに話しあうこともできずにその場を去るしか無かった…。因みに、ちゃっかりジュエルシードは頂いてきた。

《さて、称号はどれにします？愚者、間抜け、役立たず、カス、それとも能なし？》

「…すまん。」

「ア、アハハ…。」

この時、なのはがフィアと再会したあかつきには“お話”ではなく“O H A N A S I”することを心に固く誓っていたことをフィアは知るよしも無かった…。

「絶対なの!!」

第十一話（前書き）

今回オリキャラ二号の名前出します

第十一話

フイアー side

「温泉？」

「うん、さっきのくじ引きで貰えたんだ。」

先ほどの白い魔導士のことは、今日はもう忘れて三人で商店街へ買い物に行き、今はその帰りである。そして、別行動中にフェイトはくじ引きに挑戦し日帰りの温泉旅行のチケットを手に入れたようである。

「ほほう、そりゃいいや。行くつじゃないか。」

「え、でもジュエルシードが…。」

「今だってフェイトのサーチャーと俺の使い魔で探査してるのに全然見つからねえじゃん。」

先日からフェイトはサーチャーをとばし、フイアーは鴉のような使

い魔を大量に飛ばしジュエルシードを探しているのだが一向に反応が無いのである。

「あれって多分、軽く暴走しないとただの石ころと区別つかないんじゃないのか？ だったら、時がくるまでノンビリする方が後々ためになるってもんだ。それに最悪の場合、俺の使い魔がどうにかするさ。」

「アタシもそう思うよ。なあフェイト、今までロクに休んでなかったんだからたまにはさあ…。」

その言葉を聴いてニヤリとするフィア。段々分かってきたが何事も控えめで遠慮気味のフェイトは自分とアルフが二人で言うの大抵…。

「分かった、そうするよ。」

首を縦に振るのだ。フィアとアルフは視線を合わせ。

（（グッジョブー！！））

と、互いにアイコンタクトして心の中でサムズアップするのだった。まだ出会って一日たらずだが、三人ともすっかり馴染んできたよう

である。

「んじゃ、今日はさっさと帰るか。」

「あれ？夕飯の買い物は？」

「お前は即席ラーメンとレトルト以外は食い物と認識しないのか…？」

そう言って買い物袋に入った食材達を見せる。

「だって私もアルフも作れないんだもん…。」

《女の子なんだからちゃんとしたもの食べなさい。お肌にも悪いですよ。》

唐突に会話にログインしてきたリリア。一応女性なのでやっぱこの手の話は黙ってられなかったらしい。昨晚も二人の夕食風景を見て俺と同じく何か言いたげだったが、初日から居候の身でモノ申すは流石に自重したらしい。

「お前はオカンか…？」

《あなたみたいな馬鹿とずっといたらイヤでもこうなります。》

「…ごめんなさい。」

「フィーアとリリアってやっぱり仲がいいね。」

《もう十年くらいの付き合いになりますね。》

もうそんなに経ったのか…そっぴゃ訓練兵のときからずっと一緒だったな…。

「…私たちもずっと一緒にいようね、アルフ。」

「当たり前さ、フェイト。」

自分たちを見て改めて絆を確かめ合う二人。微笑ましい光景にフィーアは少し笑顔を浮かべ、

「さて、帰ろうか。」

「「うん!!」」

三人は仲良く歩いて帰路についた。

みらい side

「温泉？」

知ってか知らずか、グレーの髪に緑の目をした男『八神みらい』は
フィニアとまったく同じ言葉を居候中の家の主である『八神はやて』
に発していた。

「そうなんよ。今日、魚屋のおっちゃんが『手に入れたはいいいけど
孫は遊園地に行きたいらしいから…』て言ってくれたんよ。行か
へんか？」

「そうだな。基本的に暇だし、アリアでも誘って行くとするか…。
ムッ!! 来たあああああ!!」

——ズドオオオオン！！

凄まじい突きを、釣り竿にかかった獲物がいるであろう日本の遠洋に接続された魔法陣に叩き込んだ。その余波で八神家が一瞬揺れた…。そして、

「獲ったどおおおおお！！」

「釣ったどおおおおお！！」

八神家のリビングにはやての身長より大きなマグロが釣り上げられた。

「ふっふっふ、この『どこでもフィッシング魔法陣』を開発すると早三ヶ月…長い道のりだった…待たせて悪かったな、はやて…。」

「そんなことあらへんよ。ありがとうなみらいさん、私の我儘きいてもらって…。」

以前、はやてがテレビに繋げて遊ぶ釣りゲームをほしそうにしていたので『もつとすごい作るからちよつと待ってる』と言ったのだが徹底的（特に安全面）に制作していたら思いのほか時間がかかってしまった…。

「よっしゃあ！！気合いれて料理するでえ！！」

「待てえい！！半分は魚屋のおじさんに引き取ってもらったからな！？」

「そんな関係あらへん！！目の前にある食材は全て私が屠る！！それが八神クオリティ！！」

「どうやってできたそんなクオリティ！？」

「『目の前の敵は全て我が屠る！！それが我、ラインベルトなり！！』を参考にしました。」

「俺のセリフじゃねえかああああああ！！」

「あはははは。」

自分がはやてのために言った言葉が原因であったことを知り『八神みらい』、もといた元漂流者『ミランダ・ラインベルト』は頭を抱えた。それを見てはやては笑う。そして、頭を抱えながらも『ミランダ』…いや、『みらい』はそんなはやてを見て同じように笑

顔を浮かべる。そのやり取りは、年の離れた兄妹にも、年の近い親子にも見えた。

——今の八神家に、今の八神はやてに、悲しみと涙はもう存在していなかった。彼女はもう、孤独では無くなったのだから…。

第十一話（後書き）

みらい（ミランダ）が誘うと言った相手、アリアは猫姉妹の…。
すでにみらいは原作壊し始めてます…。ですが、彼はまだ闇の書と
はやての関係を知りません…。

プロフィール2

名前 八神みらい（命名者・八神はやて）

本名 ミラन्दル・ラインベルト

年齢 26歳

職業 とある世界の元近衛銃士。現在魔法をフル活用して野菜の栽培、最近は漁業も始めた。

容姿 身長はフィアと大差無し。グレーの髪、緑色の瞳。イケメンの分類に入るが若干老け顔…。

性格 いたって真面目な性格だったが、はやてと過ごすうちに大分丸くなった。

戦術 銃剣と魔法。みらいの銃剣はボルトアクション式なのだが…そう遠く無い日に一部の魔導士を驚愕させる。

みらいはフィアより二年早く海鳴市に漂流してきており、それからずっと八神家に居候中。はやてとご近所公認の正式な八神家の一員になっている。

プロフィール2（後書き）

こいつをベースに主人公作りやよかったかなあ…でもフィアの未使用設定がまだまだあるし…。みなさま、できれば意見を下さい…。

第十二話（前書き）

使い捨ての三号

第十二話

フイアー side

「それじゃあ俺はマンシヨンの管理人さんに部屋貸してもらおうよう話してくるわ。」

「フイアー行っちゃうの…?」

そんな上目使いやめてくれフェイト…なぜか身に覚えの無い罪悪感が沸くから…。今俺達はフェイト達のマンシヨンの一階、正面入り口にいる。俺がある程度金を稼いだので（方法は伏せた）居候は今日でやめるといふ話をしたのだが…何故かそれをフェイトが嫌がるのである。

「…あゝ、あれだ、その…いきなり今日借りれるわけじゃないから、もう一日だけ厄介になるよ。」

「明日になったらいなくなっちゃうの…?」

どないせえいうねん!?

《大丈夫ですよフェイトさん。フィーアが来ないならあなたから行
つてしまえばいいのです。》

「リリア!？」

《何か問題でも?》

「…特に無いです。」

いや、あるんだけどさ。自分で言うのもなんだけど、女の子がこんな怪しい男とずっと同じ部屋にいるってのはどうなの?とか。こんなに男への警戒心薄くて将来大丈夫か?とかさ…。

《大丈夫だ、問題無い。》

「死亡フラグだ馬鹿野郎。」

《だいたい、あなたが女が警戒しなきゃいけない類の男ならとっく
に上官と教官に殺されてるでしょう?》

「まあ、ね…。」

《と、いうわけでフェイトさん。なるべく近くの部屋を借りますのでジュエルシードの件以外でも気軽に来てください。あ、バルディッシュさんも忘れずに連れて来て下さい。また（・・・）色々おしゃべりしたいので。》

「うん、わかった!」

満面の笑顔だよこの子…不覚にも癒された…。会ってまだ一日しか経ってないってのに随分と懐かれたみたいだな俺…。

（ありがとね、フィーア。）

（アルフか。むしろ俺みたいな不審者と仲良くしてくれて礼を言いたいのはこっちだ。）

アルフが念話で話しかけてきた。

（最初は怪しい奴なんて言っただけだったよ。これからよろしく頼むよ。）

（俺なんかでいいのか?）

（フェイトがあんな表情するのはアタシ以外だとフィーアが初めてだよ。アンタなら信頼できる。）

そこまで言われると満更でもないな…むしろ、嬉しいよ。ならば、それ相応に応えなけりゃな。

（分かった。任せろ。）

（ありがとう。）

んじゃ早速、手始めに料理でも振る舞うとしますか。……おっと、こいつは…。

「なにせよ管理人さんと話すから先に行つて。あとで夕飯作つてやるから冷蔵庫に食材しまつといてくれ。」

「分かった。待ってるから早く来てね。」

「はいよ。さっさと片付けてくるよ。」

そう、“片付けにね”。

??? side

ようやく見つけたぜ、黒服の漂流者…。上の連中は何のつもりか知らないがせつかくの休暇を潰されたんだ、八つ当たりで手足の2、3本へし折っても文句は言わないだろう。それにアイツらがほしいのは漂流者じゃなくて漂流者の持つ技術だ。別に生け捕りにする必要もない。ミッドチルダの人間が近くにいるが、まあ証拠が残らなきゃ何してもいいって言ってたから…。

「あのガキは殺しまえれば問題無いよな？」

封鎖結界を展開すりゃ、あのガキも飛んでくるかもしれないが敵にならねえだろう、さくつと殺して終わらせて休暇の続きといこうじゃないか。

「さあて、封鎖結界てんか——」

「こんばんわ。名も知らぬ誰かさん。」

「っ!？」

気づけば後ろに目的の男、フィアがいた。ただその表情は、割と穏やかな筈なのに恐ろしいものを感じさせ、尚且つ口調も変わっていた。

「てめえ!!! いつのまに!？」

「君が愚痴をこぼし始めた時かな。」

なんてやろうだ…。それでも俺は同僚の中じゃ隠密行動はトップクラスの實力を持ってるってのに…。まあ、落ち着いて対処すりゃ問題無いはずだ。

「で、“僕”に何の用かな？」

「デメエは俺についてきてもらっ。」

さて、どうでる？

「行き先は？」

「言えねえな。ついでに拒否権は無え、イヤだってんなら力ずくだ。」

言葉とともにありつたけの殺気をぶつける。並の人間なら怯えて動けなくなる規模の殺気を…。すると、フィーアは少し考えるような仕草を見せ、一言…。

——君は素人かい？

「…ハア？」

コイツ…俺は暗部のエースだぞ！？あの“脳味噌共”の無茶な命令に応えられる数少ない人間なんだぞ！？それを素人呼ばわりだど！？ぶち殺してやる！！

「てめえ、生け捕りはやめだ！！死体にして持ち帰ってやる！！」

「まあ、少し話を聴きな。君の上司が依頼主の目的は僕が僕に関わるものだろ？」

「だからどうした!？」

御託はいい、とつと殺らせろ…。

「そういう時は嘘でも何でも使って標的の警戒を解くのが先決だ。そうすれば標的も自主的に協力してくれる。そしてあわよくば自分の拠点に連れて行き、より優位な状況を作る。」

「しつたことか!！」

「次に、接触する前に必ず標的のことは調べておくことだ。特に性格は先程言った警戒を解くための手段に必要不可欠。言葉を選ぶための参考になる。」

「てめえの講義もどきなんか聴きたくねえんだよ!!俺は「そして、最後に大切なのは標的の実力を見誤らぬこと。」いい加減にしやがれ!!」

「自分より格上の相手に決して正面から相対せぬこと。任務を遂行せず死ぬのは愚者の選択だ。さて、ひとつ問おう。」

——本気で“僕”を殺せると思ってるのかい？三流風情が

途端、男の体に絶対零度に匹敵する悪寒が走った。先程男が発した殺気など比べるまでもない大規模な殺気がフィーアから放たれていた。男はただ恐怖に震えるしかなかった。

「な、なんなんだお前は！？」

「知る必要は無いよ、君は僕に“片付けられる”のだから。」

——そう、この世からね。

「それじゃあ、始めようか。」

——黒による殺戮劇が今、始まるうとしていた

第十三話（前書き）

この話いらなかったかも…

第十三話

リリア s i d e

私の主兼相棒のフィーアに対するタブーが3つある。

1、彼の身内を傷つけるような言動。

2、自分自身の決めたルールを自分で破って尚且つそれに自覚が無い。

3、フィーアの過去（悪夢）を思い出させるもの。

2に対しては度合いにもよるが、まあ彼自身たいてい嫌悪感を抱く程度で済む。3は彼に対して一番やってはいけないのだが…今はあまり語れないので割愛する。で、1についてだがこれは普通の人からしたら誰だって普通に許せないことだろう。しかし、フィーアはこれに関して覚える怒りの限度が無い。特に彼の身内を『殺す』なんて言った日にはその日のうちに殺されかねない。これは3のタブーが関係しているが今回は多くを語るのはやめる。さて、そんなフィーアの前で

「あのガキは殺しまえば問題無いよな？」

なんて言ったらどうなるのか？その答えが目の前にあった。

「う……ぐ……かはっ……」

「どうしたんだい？もう疲れたのかい？」

先程の言葉を吐いてしまった男、今は『名無し』と呼んでいる男が見るも無残な状況で転がっていた。纏っていた戦闘服は血まみれでボロボロ、武器は跡かたも無く粉碎され、両足も砕かれ、左手はおかしい方向に曲がっていた。右手にいたっては“無くなっていた”……。

「この程度で戦えなくなるのかい？なんて脆い生き物なんだろうね。」

「……化け物……ぐはっ……！」

「あ、まだ遊べそうだな」

追撃の蹴りを喰らわす。因みに今のフィアは手ぶらである。というより最初から何も手にしてない。そう、フィアは彼を最初から

最後まで“素手で”文字通り、なぶり殺しにしているのだ。もう『名無し』に戦闘意欲は微塵も残って無かった。

「さて、もう少し遊びたいけど、あの二人をあまり待たせたくないから用件をすませようか。」

「な…なん…だ…？」

「“お前”の所属か依頼主を“俺”に教える。」

『君』が『お前』に、『僕』が『俺』に戻ったことに少し安心する。ようやく、落ち着きが戻ったようだ。場合によっては“発狂”する前に鎮静剤を打つつもりだったが…もうその必要はないようだ。

「い…言えねえ…言おうとしたら…死ぬよう…に細工され…てる…。」

「しょうがねえな…因みに、俺の正体の目星ついてんのか？」

「た…だの…次元…漂流者と…しか…。」

『次元漂流者』という言葉を使いましたか。ということは…。

《ミッドチルダの人間ですね。》

「管理局員か？法の番人にしては素行が悪すぎだな…。裏仕事の人間ってところか。」

《どちらにせよ、コイツはどうします？》

「そうだな……。せええええい！！」

——ズドムッ！！

「ぐあああああああああああああつ！！………
(がくつ)。」

「お前はもう（魔導士として）死んでいる。（キリッ）」

指で名無しの胸部の中央あたりを指でおもいつきり突いた。そこには魔法を使う者のほぼ全員が持つといわれる秘孔があり、そこを突かれた人間はもう一度そこを同じように突かないと魔法が使えなくなるのだ。

「これで、ただの人間として警察に引き渡して万事解決。」

《解決しません。これからどうする気ですか？管理局と2日目から接触しちゃって…。》

「大丈夫だろ。さっきも言ったがこいつは十中八九裏の人間だ。そして多分ベルフィーア連邦のことは知らないだろう。」

《何故です？》

「何もかも雑すぎるんだよ。俺の戦闘能力を知らない、俺の素性も知らない、にも関わらず俺を捕まえにきた人数は雑魚が一人…。連邦の未知の技術、俺自身を最初から狙ったにしては随分と準備がお粗末だ。いくら急に正体不明の人間がこの世界に現れたからってもう少し何かしら準備するもんだろ？」

《そうですね…。つまり、あなたはコイツらに対してのイレギュラーな存在だとも？》

「多分そうだ。おそらく本命は俺じゃあ無い。俺がそこに急に現れたから慌てて対処しにきたんだろ。しかも裏の人間が来たってことは、その本命は奴らが表沙汰にできない何かだ…。当分は様子見になるが、管理局全体が敵にまわるのはまだ先の話になるはずだ。」

《結局その裏の人間どもはどうしますか？》

「無視だ。流石にこつちから積極的に行ったら奴らに表の人間を使う大義名分を与えかねない。まあ、襲ってきたら正当防衛は続けるけどな…。」

ほんと考えてないようですね、この人は…やらかしたあとに考えてる可能性もありますが、結局いつも万事解決しますからあまり文句も言えないんですね…。

「…おい、フェイトに続いてお前まで何か失礼なこと考えてるだろう？。」

《そんなことないですよ。早くコイツを片付けて帰りましょう。》

「話逸らしたな…？いいや、とにかくそうし…あれ？」

動けなかった筈の名無しがその場から消えていた。

《ワープ反応確認。魔法による転移とみられます。》

「秘孔突いたから魔法は使えないはず…。道具でも持ってたのか？」

《まあ、連れて帰る気はありませんでしたからいいのでは？》

「それもそうだな…。おっと、時間掛け過ぎたな。部屋借りる相談は明日にするか。」

フィーアは夕飯を作るため、フェイト達のもとに帰っていった。そこに先程の魔獣のような雰囲気は一切無く、いつもの明るい彼に戻っていた。

尚、リリアの管理局による更なる襲撃に関する心配は、間接的に2年前の『八神みらい』の手により杞憂に終わる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0721x/>

漂流者はハイブリッドな現役将校～オヒトヨシナシニゾコナイ～

2011年10月18日13時07分発行